



# 男は 痛い !

國友万裕

第 49 回

『正欲』

## 1. お金がない！

前回の連載から3ヶ月。この3ヶ月で何が起きたか。この3ヶ月間はお金に苦しかった。

なぜ、なのか、旅行もしていないし、里帰りもしていない。大きな買い物もしていない。マンションの契約金も、2年おきなので、今年は払わなくていい年だった。なのに、9月から11月にかけてほとんどお金がなかったのだ。

もうすぐ60歳。俺は非常勤だから70歳くらいまでは仕事はするつもりだが、退職金は出ないし、そろそろ蓄えを考えなくてはならない。

何よりもショックだったのは国民年金基金が年間で15万くらいしか入らないことがわかったことだった。もっとたくさん来るのかと思っていたのに。2ヶ月で3万円くらいだからお小遣い程度にしかならない。これまで月に2万4千円くらい払い続けて、月々1万5千円くらいの足しにしかならないというのでは、悲しい。年金は死ぬまでもらえるので、長生きできるんだったらいいが、もし早死にしたりしたら、払い損である。

「年取ってくると、1万円、2万円くらいのお金がものすごく大きくなるものなのよ」と母からは言われている。

もちろん、60過ぎたら、国民年金も国民年金基金も任意なので、絶対に払わなくてはならないわけではなくなるのだが、でも払い続けておいた方がいいと母はいう。

この原稿を書いている現時点では、クレジットカードのキャッシングで数万円は借りないことには、次の給料まで持たないという状況である。

一番大きいのはおそらく税金である。市民税・府民税は2月から6月くらいまでは払わなくていいのに、そのあと一気に払わされることになるため、それで一気に失費が増えるのだ。

これからは生活を狭めなくてはやっていけなくなる。貯金だってたくさんはない。生活保護なんてもらったら、自由がきかなくなる。どうしよう。どうにかせねば。

とりあえず、当面は節約するしかない。そう思って、水筒を持ち歩くようになった。大学にも給水機は設置されているところが多いので、そこで水を吸水すれば、確実に1日100円から200円は節約できる。

一時期はそれをしていた時期もあったのだが、いつしか、もう面倒くさいし、水筒持って行くのは重いしで、いつの間にか気前よく自販機で買う生活になっていったのだ。

とは言っても、月々の節約の額はせいぜい5000円くらいだろう。いや、でも5000円と言っても大きい。5000円あれば、映画だって3本は見れる。

その後、スポーツクラブを解約した。俺はボクシングジムに通っているが、その他に近所のジムの会員にもなっていたのだが、ボクシングのみに絞ることに決めた。近所のジムにはかれこれ18年くらい籍を置いているが、真面目に通った時期はほとんどないように記憶している。

30代までは、プールには週3回も通っていて、水泳だけは普通よりもできるという自信をもっていた。一時期は、20代から30代の初めにかけては、週5日の時もあった。ところが、40歳になると仕事が忙しくなり、徐々に水泳に行く回数は減って行った。

そのジムはプールだけではなく、ウエイトトレーニングもできるし、スタジオプログラムもある。何よりも近所だ。ところが仕事が増えるともうクラブになんて行く気にはならなくなるのだ。いつしか、仕事中毒に俺はなっていったのだ。

何よりも30代の頃までは仕事は暇だったけど、その分、貧乏だったので、税金や年金も払えない生活が続いていた。40になると、仕事は忙しくなったものの、経済的なゆとりはできたので、税金と年金は少なくとも払えるようになり、母が困っていた時に援助することもできるようになった。日本学生支援機構（日本育英会）の借金も全部払った。

ファッションや車のゆとりはないが、一応今は親に無心しなくても生きていかれる収入があるの

だ。

## 2. スポーツ音痴のトラウマは続く

10月にある診療所に保険相談に行った時のことだ。栄養士さんが相談に乗ってくれるのだが、俺が20くらいからプールやジムに通っているのだと話すと、彼女は驚いた。「一時的に通う人はたくさんいるんですけど、そんな長いこと行かれている人なんていないから」と。

そういえば、20年くらい前までは、京都踏水会に通っていたが、そこでたまたま俺と同じ時期に水泳を始めた女性から、「あの頃からの生き残り、二人だけよね」と言われたことがあった。俺が通い始めたのは22歳の時、その後、確か30代の頃までは通っていたのだけど、42の時に近所にスポーツクラブができたので移ってしまったのだ。

彼女は今も幸せにしているだろうか。タバコをスパSPA吸う女性で、あれでよく泳いで苦しくないなあと思ったものだ。年は俺よりちょっと上か。もう60代になっているに違いなかった。

俺がスポーツクラブを無理に続けていたのは、スポーツ音痴に逆戻りしたくなかったからだった。スポーツができなかったトラウマは今でも俺の中に重くのしかかっている。

これはおそらく女性にはわからない。女性の場合はそれがプライオリティではないからなのである。

俺は不登校で高校に行かなかった。しかも、高校に行けなかった大きな原因はスポーツ問題なのだ。俺の自尊心を粉々にした、当時の体育の先生は今もまだ生きているのだろうか。先日、ラグビーの平尾誠二を描いたドラマを見たのだが、そこでもそういうセリフが出てくる。今は体育会の子でも文句を言うけれど、あの頃は先生から理不尽ことを強要されても、生徒はひたすら受容するよりほかなかった。

大学に入る時も俺は体育の授業が極めて心配だった。運動神経が鈍い上に、不登校で高校にもい

っていない。だから余計に体力も落ちているし、何もできない状況だった。しかも、大学の体育の授業は男女混合である。俺のクラスは英文科で8割近く女子だったので、その前でまた恥ずかしい思いをしなくてはならない。

しかし、あの当時の俺は前向きになっていた。それも精神力で跳ね除けようと思っていた。

大学に入ったばかりの頃だ。最初の体育の授業の時だった。

その時の体育はバスケットだったので、クラスを4チーム(赤、白、黄、青)に分け、俺は赤いグループだった。その時、俺の後ろに座っていた黄色のグループのやつが俺の背中を指で押してきた。

「なあ、グループ変らへんけ。どっちみち名前なんて先生にはわからんのやから。俺の方がよくなるで、体育。絶対。」

女の子たちが見ている前でである。

まだ大学に入って間もない頃で、彼は俺と話したことすらなかったのだ。しかし、俺が体育ができないタイプのやつだということは一目瞭然でわかる。「スポーツのできない男は、どっちみち権力なんかないから、いじめてやれ、こいつ」という気持ちだったのだろう。ちなみにその子はスポーツ万能で、家柄もいいお坊ちゃんだった。

男はこういう問題に関しては女性よりも敏感なのである。「おそらく、こいつは運動神経が鈍い、そこをいじってやれ、きっと傷つくだろう」という確信犯である。それくらい、男にとってスポーツ問題は大きな問題なのだ。

その様子を見て女の子たちは、「ふっ、ふっ」と笑っていたものだ。女がパワハラされているのに、男が近くで笑ったりしたら、それも罪と見做されるだろう。しかし、男の場合はそういう場合でも平気なフリをして耐えるしかないのだ。

スポーツのできない奴は、最初から男社会のヒエラルキーの下位にしかねれないのである。女の子たちのみている前であんな言い方をされて、傷つかない奴がいるだろうか

今度、ある京都を舞台にしたドキュメンタリー

映画が公開になるのだが、見たいと思う反面複雑な気持ちである。

どうやら、その映画には俺の大学の頃の他のクラスメイトが出ているのだ。先述のお坊ちゃんとは違い、京都の公立高校から大学に入った奴だった。当時は、京都の公立高校はのんびりしていることで有名で、1年浪人しても有名大学には入れないと言われていた。

だから立命館に入れるやつは、おそらく勝ち組である。そのせいなのだと思うだが、あの当時の彼は態度が天狗だった。しかも、なぜか、俺にことあるごとに接近してきていた。

俺はあの頃は引きこもりからやっと一步抜け出したところで話をする友達もいなかった。彼からしてみれば、そういう俺は、いじりやすいのである。安心して威張れる。彼はいつだって俺の近くの席に座ってきて、俺を馬鹿にしたようなことを言ったり、横暴な態度をとったり、俺の筆箱からシャープペンシルの芯を抜き取ったりして、俺の気を引こうとしていた。

彼からしてみれば、それは友情の表現なのである。彼はすっかり俺と友達になった気でいて、友達だからこそ無礼が許される、馬鹿にしたような態度が許される、お前のものは俺のものという態度が許されるというおふざけ気分だったのだ。実際には彼の方も友達なんていないタイプで、気は小さいのだが、尊大な態度でなければ人と接することができないタイプだった。俺は、彼が人のことを「〇〇くん」「〇〇さん」と敬称をつけて言っているのを聞いたことがない。彼は誰でも呼び捨て、誰でも「お前」だったのである。

そして、女の子たちからの悪口が始まったのは、1年生の秋ごろからだった。

俺の方も、嫌なことをされたり、勝手なことをされたりしてもそれを怒ることすらできなかった。それくらい自尊感情が落ちていたのだ。俺は高校に行けなかった。俺は元々できそこないの半端者なのだ、自分でもそう思っていたから、当然怒っていいような正当な怒りすら抑圧するようになって

ていた。

今だったら、いじめやハラスメントはする奴にも問題があったにしても、する方が悪いんだという理論が大勢である。しかし、あの頃はまだまだセクハラやパワハラという言葉すらなかったのだ。

学校の問題にしてもそうだ。この頃は生徒が問題を起こすと学校で何かあったのではないかと、学校の方が咎められるのだが、あの頃は全て生徒のせい。いじめや先生から怒られたくらいのごときは跳ね返す根性をもつやつが好ましいとされていた。

そんなわけで、大学の頃は、思い出すのも忌々しいくらいに踏んだり蹴ったりだった。ほとんど良いところなしの4年間だったのである。なぜ、あれだけ「一生懸命」という気持ちは持っていたのに、これだけ悪いことが続くのかと思うくらい、悪いことが続いた。

それに、あの当時の大学はレジャーランド。友人もなく、遊び相手もいなかった俺は、ますます惨めさを募らせていったのだった。あの時、むしろ友達をつくることやまともになることなんかは諦めて、勉強だけに集中していたら、もっと建設的な大学生活が遅れていたのかもしれない。ところが、あの頃の俺は必死で普通になりたかった。

時代は80年代。ノンポリで、景気が良く、一億総中流のベルトコンベアの時代である。ベルトコンベアから大きく外れてしまった俺は、自我をなくしていたため、他人を無批判に受け入れることしかできなくなってしまうていた。今でも大学の頃のことを思い出すと切ない思いが湧いてくる。

### 3. 「引き寄せの法則」って本当なの???

「引き寄せの法則」についての本がこの頃たくさん出ている。自分が悪いことを予想していると実際にそうなるという自己啓発本である。これには真実も含まれてはいるが、俺はこの理論を支持したくないのだ。何故かと言うと、大学の頃の俺は、前向きになっていたのだから、女性に対し

ても偏見なく接していたし、誰に対しても誠意を持って接していた。スポーツができないことも、できる限り気にしないように努めていた。なのに、俺は心なく傷つけられることになったのだ。

せつかく、一生懸命、良縁を引き寄せようと前向きになっていたのに、悪縁ばかりが襲ってくるのだった。そして、過去のトラウマに引き戻される。どれだけ前向きに進もうとしても、必ず、後ろ向きにさせられてしまう。その繰り返しが続いて行ったのだ。

今振り返ってみれば、仕方がない面もある。それまで長年引きこもっていた俺がいきなり大学に行ったからといって、つきものが落ちたように治るわけではない。俺の考えが甘かったのである。

あの頃は適切な指導ができるカウンセラーもいなかったし、誰も理解してくれなかった。むしろ、荒野の中に投げ出せば、そこでどうにかしていくだろうと思っている人の方が多かったのである。気の持ち次第で、人間の心なんていくらでも変えられる。そう思い込んでいる人が本当に多かったのだ。今だったら、幼稚な考えなんだけど、あの当時はまだ社会が成熟していなかったのだった。

しかし、この連載にも書いてきたが、俺の人生は確実に尻上がりだった。とはいうものの、60を過ぎるともう社会的な尻上がりは期待できない。

その俺の人生が少しずつ安定していったのはプールに通い始め、他大学の大学院に進んでからだった。とはいうものの、そのあとも亀の歩み……また、同じことを書いているなあ(笑)。

あれは俺が29歳の時だ。初めて大学で非常勤をすることになって、新年度の打合せに行った。その時、帰り道で、見知らぬ先生と一緒に歩いて、電車の駅まで歩いた。その時一度しかお会いしていない先生だから名前も顔も覚えていない。

その先生に、「本務校はどこなんですか」と尋ねたところ、「私は非常勤だけなんです。立命館とかあちこち回っていますけど」という返事だった。その先生は、当時40代くらいだったから、この年齢で本務校がないというのはつらいだろうなあ

思ったものだ。

まだ 20 代で、非常勤をこれから始める俺からしてみれば、俺は絶対にどこかに決まるだろう。落ち着くだろうという変な自信があったのだ。

ところが、そうは行かなかった。俺たちが大学院にいる頃から、もう大学教員は茨の道だと言われていたのだが、それはどんどん拍車がかかっていき、しかも、俺たちの頃は大学の英語の先生といえば、ほとんど文学系の先生だったのが、語学教育の先生に陽が当たるようになっていって、その後、文学は冬の時代へと陥って行った。

結局、俺は非常勤講師のまま、人生の終活の時期に向かおうとしている。そのことを後悔はしていない。京都に新たなアイデンティティができたからである。

もう早いもので、非常勤講師を始めて 30 年以上の月日が流れている。その間には様々な人間模様を経験した。

若くして出世コースに乗った先生が早逝したり、そうは見えない人がセクハラで仕事を追われたり、うつ病や統合失調症で早めに仕事を辞められたり、あるいは癌闘病しながら、どうにか仕事を続けている先生もいる。コロナの基礎疾患持ちで、非常勤が続けられなくて、故郷に帰られた先生もいる。人生は本当にドラマ。思い通りにはいかないものなのである。

俺だって思い通りにはいかなかった。俺は非常勤のままだし、収入だって少ない。何よりも俺は子供の頃のジェンダーのトラウマを今でも消化できずに日々苦しんでいるのだ。

その俺も、もう 60 歳が目の前なのである。ここまで生きてきた自分を褒めてあげたいと思う。その間にはつらいことはたくさんあったけど、いよいよ人生の終活の時期に入れることは嬉しいことでもある。

坂本龍一、谷村新司、もんたよしのり、大橋純子がなくなった、皆 70 代の前半で亡くなっている。昔だったら、それくらいの年で死ぬのはむしろ普通だったのだ。平均寿命は 70 ぐらいだったわけ

だから。それを考えれば俺だってあと 10 年ちょっとである。

もうジタバタすることもない、見果てぬ夢を追うこともない、あとはこれまでしてきたことを整理するだけのことなのだから。

そして、「引き寄せ医の法則」が今になって現実になってきている。俺は 3 年前からボクシングジムに通っているが、通い始めてから確実に変わった部分がある。男っぽい世界にいることに抵抗を感じなくなってきたことだ。

ジムは女性もいるのだが、人数が少ない。俺が行く時間帯にはほとんど女性はいないんで、上半身裸になって、練習することもできる。この歳になって、マッチョになることもないのかもしれないが、幼い頃のトラウマはそうそう消えるものではなく、今でも毎日のようにスポーツができず、男として劣等な存在だった俺のトラウマは襲ってくるのである。

若い頃はいかにもスポーツができないタイプの男に見られていたが、今はそうは見られない。

ボクシングのみならず、この頃の俺は親しくなりたい人と親しくなれる。学生たちからも慕ってもらえる。女性に対する不信感はまだまだ抜けていないが、それもこれから抜ける日は来るかもしれない。

ミニドックの結果も良かった。まだ体は健康なのだ。

ただ、60 過ぎて、ブレイクする先生なんて滅多にいないだろう。俺の知っている限りでは、『嫌われる勇気』の岸見一郎さんくらいだ。

大学教員の場合、普通の仕事よりも定年は遅い。普通は 60 で定年で、その後再雇用で 65 歳まで仕事をする人が多いみたいだが、大学の場合は早いところでも定年は 65 歳のところが多いようだ。

俺は元々非常勤なので、早いところは 65 で定年のところもあるが、70 くらいまでは働かせてくれるところが多い。しかも、この頃は定年を伸ばすところが多くなっていて、あと 5 年の間にはさらに伸びるのではないかと予想している。

とは言っても、これから俺が脚光を浴びる時なんて来るだろうか。

もちろん、晩年になってから幸せが巡ってくる人もいるから、人生を捨てる気はないけれど、社会的な意味での成功を追い求めるのは、少しずつ終わりにしなくてはならない年なのだろう。

人間関係だって、もう新たな出会いなんてそうそうないだろう。今までの俺にとって、幸せな出会いは、たくさんあった。不幸な出会いもそれ以上にあったが、もうさまざまな人間関係を乗り越えてきて、今更悪い出会いもないだろうけど、そうそう人生を変えてくれるような出会いも起こらないだろうと思えてくるのである。

それはそれで構わないのだ。俺は人生のシフトを変えなくてはならない時期に来ているのだ。

#### 4. 『正欲』(岸善幸監督・2023)

最近、毎日のようにジャーニーさんの事件がマスコミで報道されている。ジャーニーさんが少年愛者で、生前、様々な若い男の子たちを虐待してきたということが次々に明るみに出てきている。

ジャーニーさんの事件が明るみに出たことはある面、画期的なことだった。

男だって性的虐待に遭うのだということを世間に知らしめたからである。俺をこれまで苦しめてきたのは、男は性的虐待をされても、体罰やDVの被害に遭っても女ほど深刻ではないという社会の思い込みだった。

この連載で何度も書いてきたが、俺が中学の頃、男子全員を上半身裸にして、体育の授業をやらせていた体育教師もおそらく、ジャーニーさんと同じ性癖の人だったのではないかと思う。真冬に生徒を裸にするなんて、何の意味もないようなことを男子生徒たちは半年もやらされていたのだ。

もちろん、抵抗を感じないやつもいるのだろう。一方で、抵抗をもっていたやつは確実にいたはずなのだが、日本は同調圧力が強いため、体育会系の先生からそれを強要されれば、従わざるを得ず、

とりわけ俺は、男性ジェンダーに激しい抵抗を感じていたため、究極のジェンダーを強要されたことで心が壊れたのだった。

俺はその忌まわしい経験を語るのに膨大な年月がかかった。母に話したのが22歳の頃。不登校になってから、すでに7年も経った頃だった。

母は俺がそのことを打ち明けた後、しばらくはご飯も喉に通らなかったそうだ。また、それで全ての謎が解けたということを書いてくれた。「あなたのあの当時の様子を重ね合わせてみると、確かにそうだったわね」と俺が急激に精神的に壊れて行ったことの意味がわかったというのである。

カウンセラーに、その経験を話したのはさらに15年以上の月日が流れた39歳の時だった。そのカウンセラーの先生は60代の学者肌の男性だった。それまでにも何人ものカウンセラーについていたし、メンズリブの人たちともつきあいはあったのだが、そのことだけは話すことはできなかった。それくらいトラウマは大きかったのだ。

『正欲』という映画を見た。間違いなく今年の俺にとってのベストワン映画である。俺は映画を見た後、早速原作本をKindleで買った。これは買うべき本だと思ったからだった。

多様性の時代を反映させて、様々な性欲を持った人物が登場する。性欲に正しいも間違っているもない。どういう性欲であっても、実際に性行為をしてしまったら問題だけど、欲望を持つだけだったら、犯罪とは言えないからである。

あの時、男子生徒全員を裸にした教師は、明らかに教育という名を利用して、自分の性欲を満たそうとしていた。

当時の俺たちは毎日、セクハラされていたのだ。

しかし、まだ中学生。それに抵抗する理論も何もなく、皆仕方がないから、したがっていたのである。自分を騙していたのだ。

おそらくジャーニーさんの事件が明るみに出たことで、一般男性の中にも、そのトラウマをカミングアウトする人も出てくるのではないか。

ただ、ジャーニーさんの場合は、被害者も男性で

あるものの、加害者も男性であることが問題なところだ。現実には、女性が加害者というケースもたくさん存在するのだ。しかも、女性が性被害を受けるよりも、男性が性被害を受ける方がさらにトラウマが深く、長いというデータも発表されているのだそうである。

おそらく、男性が性行為の被害者になってはならないのだという抑圧があるため、それで女性以上にその事件を誰かに話すことはできないし、苦しみが深くなるのだと思われる。

『正欲』では、ある女性が、ハラスメントを受けた経験があって、そのせいで男は嫌いで、気持ちが悪いのに、あなたのことは好きなのだとする男に告白する場面がある。

しかし、彼の方は自分の悲しみを人に話すような女性は好きではないと彼女をそっけなく突き放す。

この場面もいいと思った。

一般的に女性の場合は、自分の悲しみや悩みを打ち明けることで男を口説こうとするのだ。一方で、男は女性の悩みを聞かされるのは負担なのである。

女性が彼氏でもない男から、性行為を求められるのが不快であるのと同じで、男だって、彼女でもない女からプライベートな悩みを共有しようとされるのは不快だ。

男の方は悩みや泣き言を他人に打ち明けることを禁じられる。男が悩みを打ち明けて、共感や同情を求めたりしたら、男のくせにみっともないと言われる。しかし、女性の場合は、男を口説く手段として、悩みを打ち明けてくる人が往々にしている。男と女の非対称。これは明らかに女性の特権なのである。

そう考えれば、女が口説き目的で悩みを男に打ち明けるのは、一種のセクハラなのである。

前回の編集後記で予告した通り、この連載、あと2回で終了である。その後も書かせてもらいたいとは思っているが、これからは60になるので、そのあとは、リニューアルしたいと思っている。

したがって、次回の連載では、これまでの12年の総括をしたいと思っている。この12年間、一貫して変わっていないのはやはり女性に対するわだかまりである。女性の読者の中には不快になる人もいるかもしれないが、それくらい俺が女性から受けたトラウマは、過酷なものだったのである。それを次回は書いてみようと思う。書くことで蟠りを切り捨てようと思う。

女性への蟠りを溶かすこと、それが、これからの人生の課題、俺にとっての終活である。